

## 堀河百首題「山」をめぐる

堀河百首題の雑の歌題のうち、「山」「河」「野」「関」「橋」「海路」の六歌題は、既に指摘されているように歌枕、地名、名所が歌題設定に当って重要な要素に占めている。それらは、雑の歌題配列において、二十歌題のうち、六歌題は集中的に並べられ、構成意識に拠って配列されたと考えられる。その六歌題のうち、今回は、「山」の歌題を取り上げて、そこに詠まれている歌枕、地名、名所の特性を抽出し、その歌題をどのように捉えたかを考えてみたい。

「山」という歌題は、堀河百首題と共通する歌題が多数ある『和漢朗詠集』に見られ、六歌題の中で唯一の共通する歌題である。

また、『万葉集』第十巻秋雑歌の中に、「山を詠む」(2181)や秋相聞の中に「山に寄する」(2238)が見られる。『古今和歌六帖』第二に山という大きな分類がみられ、その中に「やま」という細分が成されている。

勅撰集において、『堀河百首』成立以前に歌題としては見られず、『拾遺集』雑上(490)に「山をよめる」という詞書がみられる。このように、「山」は、歌題という明確な意識はないにしろ、『万葉集』以来、主題とされ、伝統的に詠み続けられている。

堀河百首題「山」の詠歌を具体的に検討してみることによろう。

「山」の詠歌で、類形的発想に拠った歌をみると、旅に出て詠じた歌が五首(1364、1366、1370、1372、1376)みえる。

### 内藤愛子

1364 あらしふくこくれの雪をうちはらひけふこゑぬるやさやのなかやま

1366 駒なへてくれぬと人はこそけとも道をはるけき富士の柴山

1370 東路やしらぬさかゝるにやとりして雲るにみゆる筑波山かな

1372 白露のかゝる旅ねもならはぬに深き山路に日はくれにけり

1376 あしからの山のたうけにけふきてそふしのたかねのほとはしらる、

この五首のうち、隆源の歌(1372)のみ、歌枕、地名が詠まれず、旅の体験に即した詠歌と受け取れる。その他四首は、写真的な詠歌であり、歌枕、地名に拠って、より具体的なイメージと結び付ける効果がみられる。

また、山を賞め讃えの類歌として二首(1361・1363)が挙げられる。

1361 かみさふる葛城山のとかければあさゝるのくものはる、まそなき

1363 あさみとりかすみてわたるたえますよりみれともあかぬ妹背山

かな

この二首は、いずれも「かみさふる」、「みれともあかぬ」という、『万葉集』の歌語に拠っている。

このように、堀河百首題「山」において、類形的表現や発想に拠る歌が数少なく、様々な発想に拠っており、詠歌の多様性を示している。このことは、「山」という主題が、『万葉集』以来読み続けら

れているという伝統的な主題であることと無関係には考えられないであろう。

次に、「山」歌題の特徴の一つとして、十六首のうち、十一首までが、歌枕、地名が詠み込まれ、しかも、同一の歌枕、地名による詠歌はみられない。「山」の詠歌にみられる歌枕、地名は、「葛城山」、「妹背山」、「佐夜の中山」、「越の尾山」、「富士の柴山」、「小泊瀬山」、「荒山」、「筑波山」、「黒髪山」、「まゆみ山」、「足柄山」で、十一首いずれも違った歌枕、地名に拠って詠作している。そのうち、「葛城山」、「妹背山」、「小泊瀬山」、「富士柴山」、「荒山」、「筑波山」、「黒髪山」、「足柄山」は『万葉集』に例歌が挙げられる。また、「越の尾山」、「富士柴山」、「荒山」、「黒髪山」、「まゆみ山」は、『堀河百首』成立以前に例歌がみえない歌枕、地名である。それらの歌枕、地名について各々を具体的に検討してみたい。

まず、それらのうち、『万葉集』に例歌が挙げられる歌枕、地名から検討してみよう。

「葛城山」は、『万葉集』(512・2214・2457)以来、詠まれ続けている伝統的な歌枕である。勅撰集においては、『古今集』(1070)『後撰集』(391)『拾遺集』(779・1199)にあり、そのうち、『拾遺集』(779)は、『人麿集』(181)、『私家集大成中古I』(2)にもみえる。

『堀河百首』において「葛城山」を詠んだのは、藤原公実の歌(1361)である。

1361かみさぶる葛城山のたかければ朝ある雲のはるるまそなきとあり、「葛城山」と「雲」という組み合わせの例歌は多数みられ、例えば、『万葉集』(2457)『拾遺集』(779)にみられる。それらは作歌のパターン化された組み合わせと捉えられる。

2457はるやなきかつらきやまにたつくものたちてもゐてもいもをし

そおもふ

779あしひきのかつらきにゐる雲のたちてもゐても君をこそおもへしかも、「かみさぶる」という万葉的な表現を使用している。

このように、「葛城山」の伝統的な詠法を踏襲し、しかも、万葉風な表現に拠った称讃歌と受け取れるであろう。

「妹背山」は、『万葉集』(547・1214・1251)にみられ、そのうち547は、547おくれるてこひつつあらはきくのくにのいもせのやまにあらましものぞ

とあり、紀伊国にあることが知られる。また、勅撰集にも詠歌がみられ、伝統的に詠まれている歌枕、地名と言える。勅撰集では、『古今集』(828)『後撰集』(380・1215)に例歌が挙げられる。

828ながれてはいもせのやまの中におつるよしの川のよしやよの

中

380君とわれいもせのやまも秋くれは色かはりぬるものにぞありける

1215むつまじきいもせのやまの中にさへ隔つる雲のはれすもあるかな

それらは、いずれも「妹背山」の「妹背」から人事に即した詠歌であり、そのような詠法に拠ったものが多くを占めている。また、1215のように、隔つものとして雲が用いられ、そのような発想で、霧や霞を詠んだ例歌もある。

また、『拾遺集』(619)には、『万葉集』(1251)の歌がひかれている。619おほなむちすくなみ神の作れりしいもせのやまをみるそうれしき

この歌は、「妹背山」を讃め称えた歌であり、この歌と同様な発想で詠まれた歌が『堀河百首』の源国信の歌(1363)である。

1363 あさみとりかすみてわたるたえまよりみれともあかぬいもせや  
まかな

源国信の歌は、従来の「妹背山」を詠じたものと異なり、叙景的に仕上げている。しかも『万葉集』1251の発想に拠りながら、「みれどもあかぬ」という万葉集的表現を使った「妹背山」の称讃歌であろう。それは、少なからず、新しい歌枕表現志向として捉えられるであろう。

「小泊瀬山」は、大和の歌枕で、『万葉集』3828にみられる。しかも、勅撰集では、『後撰集』1243に一首みえるのみである。

3828 事しあらは小泊瀬山の石城にも隠らはともにな思ひそ我か背

1243 すがはらや伏見のくれにみわたせは霞にまかふをはつせのやま

『堀河百首』以前に「小泊瀬山」は、例歌が少ない歌枕、地名である。だが、『堀河百首』には、三首(88・215・1367)詠まれている。

88 たち返る春のしるしはかすみしくをはつせ山のゆきのむらさきへ

(俊頼・残雪)

215 常よりもをはつせ山のよふことり声むつましくきこゆなる哉

(源頭仲・呼子鳥)

1367 ゆふつくふさすゆふくれにみわたせはくもそか、れるをはつせ

の山(仲実・山)

そのうち、歌題「山」の詠歌は、1367の詠歌で、その歌は『後撰集』

1243(同歌は『古今和歌六帖』844「山」に分類されている)の二、三

句に類似が見られ、何らかの影響関係が認められるであろう。

『堀河百首』の詠出歌人である大江匡房の『江師集』38(『私家

集大成中古II』51)に

38 あまのかはくものしからみこえにけりはなちりつもるをはつせ

のやま

とあり、『堀河百首』詠出歌人達の間で「小泊瀬山」はかなり詠まれて注目されていた歌枕と言える。

また、「小泊瀬山」は、『能因歌枕』、『和歌初学抄』にみえ、『堀河百首』詠出時を契機にして歌枕として定着化がなされたと捉えられるであろう。

筑波山に関連する歌枕、地名としては、「筑波山」、「筑波嶺」、「筑波嶺の山」等が挙げられる。そのうちの「筑波山」は、『万葉集』に例歌がみられるが、管見するところによると、『堀河百首』成立以前の勅撰集では、あまり詠まれておらず、『後撰集』に二首

(674・686)みられるのみである。

674 今ほてふ心つくはの山見れはこすゑよりこそ色かはりけれ

686 人つてにいふ事のはの中よりそ思ひつくはの山は見えける

私家集において、『信明集』16(『私家集大成中古I』79)には、

16 としをへて君におもひをつくはやまみねをくもるにおもひやる

かな<sup>平</sup>

とあり、詞書に「このおなし御時に、くにくのところがくゑにかかせたまへりし御屏風に」とあり、国々の名所が描かれた屏風歌の一首として「筑波山」がみられる。これらは、いずれも恋愛歌で、「心つく」、「おもひつく」の「つく」に「筑波山」の「つく」を掛けている。「筑波山」には、このような恋の表象として捉える例歌が多くみられる。

そのなかで、注目されるのは、『曾丹集』350(『私家集大成中古I』105)や『千穎集』102(『私家集大成中古I』108)である。それらは、自由な奇抜な発想がみられる。

350 つくはやまはやまのしけりしけ、れとふりしく雪はさはらさり

けり

102つくはやまつくく物をおもふにはなけきのかすそおもひまさける

この二首は、いずれも、百首歌の形態をもったなかに配列された歌であり、しかも、好忠の第四句のみが異った歌が、その当時交友関係のあった源重之の『重之集』308（『私家集大成中古I』35）に見出される。また、千頴の歌（102）も同様に、上三句までが同じ詠歌が、清原元輔の『元輔集』141（『私家集大成中古I』111）に見出される。

308つくはやまは山しけ山しけれとおもひいるにはさはさりけり  
141つくはやまつくくものをおもふかなきみみさらんほとこのころよ

このように、「筑波山」は、曾根好忠と同時代の歌人達で、『万葉集』に関心を示し、しかも百首歌を詠むという、影響関係のみられる共通の基盤に拠って詠まれた歌枕、地名と言えらるであろう。

『堀河百首』において、「筑波山」を詠んだ歌は、藤原顕仲（1370）である。

1370 東路やしらぬさかひにやとりしてくもるにみゆるつくはやまかな

旅路にある哀感を下句に寄せている。掛詞のような技巧を用いず、叙景的に仕上げ、歌枕の詠法の工夫がなされていると言えらる。

また、『堀河百首』詠出歌人である大江匡房の家集である『江師集』484（『私家集大成中古II』51）に

484 心さし君につくはのやまなれははまなのはしにわたすとをしれとあり、『堀河百首』詠出当時に「筑波山」は詠まれていた歌枕、地名と言えらる。

このように、「筑波山」は、先行の百首歌に多くの例歌がみられることから、先行の百首歌詠出歌人達が注視した歌枕、地名であり、

それらとの何んらかの影響関係を考えらるるであろう。

「足柄」に關した歌枕、地名として『万葉集』には、「足柄の御坂」、「足柄の箱根」、「足柄の峰」等、数多く挙げらるる。『万葉集』において、「足柄山」は次の二首（394・3380）で、『堀河百首』成立以前の勅撰集には例歌をみない。だが、『興風集』34（『私家集大成中古I』10）、『元真集』29（『私家集大成中古I』28）に例歌を挙げらるるのみで、あまり詠まれた歌枕、地名と言えない。

394 鳥総立て足柄山に船木伐り木に伐り行きつあたら船木を

3380 我が背子を大和へ遣りて待つたす足柄山の杉の木の間か

『堀河百首』においては、「足柄山」を詠じた歌（1376・1412）は二首みられ、注目された歌枕、地名と言えらる。

1376 あしからのやまのたうけにけふきてそふしのたかねのほとはしらるる（河内・山）

1412 あしからのやまのもみちは散るなへにきよみかせきに秋風そ吹く（師頼・関）

この二首は、既に、竹下豊氏のご指摘のように、いずれも一首の中に複数の歌枕、地名を詠じている。1376は、「足柄山」と「清見が関」で、1412は、「足柄山」と「富士の高嶺」である。このような発想は、土地の実在性があり、その二つの歌枕、地名の地理的關係に拠って一首が成り立っている。1376は「足柄山」と「清見が関」の季節の訪れの相違が示されている。1412は、「足柄山」と「富士の高嶺」の相違に拠ってその高さを捉えた詠歌である。

このような一首のうちに複数の歌枕、地名を詠じた歌は、歌題「野」の源師時の歌（1401）にもみらるる。

1401 見わたせはさかもかれ野と成りにけりいまや小倉にもみちちるらん

このように『堀河百首』において、一首に複数の歌枕、地名を詠むということは、詠法の新たな工夫の一つであり、『堀河百首』における特徴と言えるであろう。

次に、『万葉集』のみに例歌を求めることができる歌枕、地名として、『黒髪山』が挙げられる。

「黒髪山」は、『万葉集』1245・2460にみえるが、勅撰集には歌例が見当らず、管見する範囲では詠まれていない歌枕地名である。

1245 ぬばたまの黒髪山を朝越えて山下露に濡れにけるかも

2460 ぬばたまの黒髪山の山背に小雨降りしきしくしく思ほゆ

だが、『堀河百首』では、『黒髪山』を詠んだ歌が三首(433・952・1373)挙げられる。

433 旅ひとのますけのかさやくちぬらんくろかみ山の五月雨のころ

(仲実・五月雨)

952 うばたまのくろかみやまに雪ふれはなもうつもるものにそあける(俊頼・雪)

1373 うば玉の黒髪山のいたたきに雪もつもらはしらかとやみん

(隆源・山)

三首いずれも、『万葉集』の歌を典拠とした詠歌である。952・1373の二首は、「ぬばたま」を用い、黒の枕詞である。「黒髪山」の「黒」の対照として「白」から「雪」を連想している。1373は、「黒髪山」の「黒髪」と「白髪」の対照のおもしろさを加えている。このような発想に拠って奇知に富んだ技巧的な歌に仕立て上げている。

また、『堀河百首』の詠出歌人である藤原仲実の『綺語抄』に、『万葉集』から1245の歌が引用されていることから、黒髪山は当代の歌人達に関心をもたれた歌枕の一つであろう。

「黒髪山」の所在に関して、『万葉集』の歌から奈良市北部の

佐保山の一部とされているが、『五代集歌枕』『八雲御抄』には下野とみえ、栃木県日光の男体山とされ、所在はどちらであるか判明できない。

このように、「黒髪山」は、『万葉集』を典拠に求めた歌枕であり、奇知に富んだ技巧的な工夫がなされた詠作方法に拠った歌が多く、新奇な意図をもった歌枕、地名と言えらる。しかも、『堀河百首』を契機にし、「黒髪山」は、歌枕、地名として一般化し、定着化を示している。

歌題「山」で、『万葉集』に例歌のみえない歌枕、地名として「小夜中山」、「越の尾山」、「まゆみの山」が挙げられる。

そのうちの「小夜中山」は、『万葉集』に例歌がみえないが、『堀河百首』成立以前の勅撰集において、『古今集』に二首(594・

1097)、『後撰集』に一首(507)にみられる。

594 東路の佐夜の中山なかなかにしか人を思ひそめけむ

1097 かひがねをさやにもみしかかけけなくよこほりふせるさやのな

かやま

507 東路のさやの中山中中にあひ見てのちそわひしかりける

そのうち、『古今集』1097は、東歌に配列され「甲斐歌」という詞書がみえる。このように、「小夜中山」は「東路の」と共に詠まれ、人事詠の歌が多くみられる。しかも、同音反復的歌枕表現で詠まれていた。

『堀河百首』において、「小夜中山」がみえるのは源師頼の歌(1364)である。

1364 あらしふくこぐれのゆきをうちはらひけふこえぬるやさやのな  
かやま

旅の哀感がにじみ出ている歌である。また、『堀河百首』詠出歌人

である源俊頼の『散木奇歌集』733（『私家集大成中古II』62）に、

733 都をは心にかけてあつまちのさやのなか山けふやこゆらん  
とあり、歌枕を背景にして旅路の場面が思いうかべられ、旅人の心情を表わしている。先の師頼の歌（1364）と下句が、類似した表現であり、何らかの影響関係が考えられるだろう。

このように、同音反復的歌枕表現という伝統的な詠作方法を踏襲せず、詠法の工夫がみられる。「小夜中山」は、『堀河百首』詠出当時に一般化された歌枕であろうと言えよう。

次に、『万葉集』に例歌がみえず、しかも、『堀河百首』成立以前には例歌を挙げられない歌枕、地名として「越の尾山」があり、それについて検討してみよう。

『堀河百首』において、「越」に関連した歌枕、地名を挙げてみると、「越の白山」（948・1573）「越の尾山」（1365）が挙げられる。

948 かきくらしたまゆらやますふるゆきのいくへつつもりぬこしのしら山（師頼・雪）

1573 なそやこそその我身はこしのしら山かかしらのゆきのふりつもる

かな（顕季・述懐）

この二首は、いずれも「越の白山」の「白」からの連想から「雪」が詠まれている。それは、『古今集』（391・980）以来の発想に拠っているが、948は、叙景歌であり、1573は、奇知に富んだ歌になっている。このように、「越の白山」は、かなり一般化された歌枕、地名であるのに対して、「越の尾山」は、『堀河百首』では、藤原顕季の歌（1365）のみである。「越の尾山」は、『万葉集』に見えず、勅撰集にも歌例を挙げられない特殊な歌枕、地名である。

1365 みねたかきこしをやまにいろ人はしはくるまにてくたるなりけり

だが、管見の範囲では唯一、『師中納言俊忠集』13（『私家集大成中古II』57）にみえる。

13 おほつかなこしのをやまのしるしはのあをはもみへすつもるし  
ら雪

この「師中納言俊忠集」には、『堀河百首』詠出歌人達との贈答歌がみられ、俊忠との交友関係が認められる。このことから、「越の尾山」は、少なくとも『堀河百首』詠出当時には詠まれ、ある共通の基盤のところで詠まれた特殊な歌枕、地名と推察され、一過性で定着が成されなかった歌枕、地名と推察できる。1365は、高き山間で生活の様子を特殊な歌枕、地名に拠って詠作した歌である。

また、1365の歌の「柴車」という語彙は、『万葉集』や勅撰集に例のない特殊語で、「山」の歌題には、大江匡房の歌（1362）にもみえる。

1362 柴車おちくるほとにあしひきの山のとかさそらにしろかな  
この歌は、柴車が山から落ちてくる距離に拠って、その山の高さが判断できるとし、理知的な詠歌といえる。

「柴車」という語彙は、管見する範囲で歌語としてはみえず、特殊語と言える。しかも、『堀河百首』詠出歌人達には注目されていないと言えらるであろう。

次に、「富士柴山」、「荒山」、「まゆみ山」について検討してみよう。「富士柴山」、「荒山」、「まゆみ山」は、『堀河百首』成立以前、管見の範囲では勅撰集、私家集に例歌が見当たらない歌枕、地名である。だが、「まゆみ山」以外は、『万葉集』に例歌を見出せる。

それらは、単に、富士の周辺の柴が生い茂っている山、荒れた山、檀が生い茂っている山と解釈することが可能であろう。

まず、「富士柴山」は、『万葉集』（3369）に、

3369 あまのはらふじのしばやまこのくれのときゆつりなはあはずか  
もあらむ

とあり、「富士の柴山」は、田辺幸雄氏によれば、「現在の十里木東  
方付近にそのおもかげを残す」といつている。<sup>註3</sup>

『堀河百首』では、源頭仲の歌(1366)のみで、

1366 駒なへてくれぬと人はいそけとも道そはるけき富士の柴山

とあり、この歌は、「富士の柴山」や「暮」が詠み込まれているこ  
とから、少なからず『万葉集』3369を影響を受けた歌であり、しかも、  
旅路での哀感を詠じている。

このように、「富士の柴山」は、『万葉集』を典拠とした歌枕、地  
名と言える。また、『堀河百首』以降の私家集に詠まれた歌例が数  
多くあり、例えば、『出観集』247(『私家集大成・中古II』81)に

247 夕立にぶしのしは山雲かけてきよみかせきのなころをそ行  
とある。『八雲御抄』第五名所部には、「ふじ」のところに「ふじの  
しば山とも。」とあることから「富士柴山」は、『堀河百首』の詠  
出当時より歌枕として定着化していったと推察も可能であろう。

「荒山」は、『万葉集』(242・1810・3305)にみられ、そのうち、次の  
二首は「荒山中」を詠んでいる。

242 おほきみは神にしましては横の立荒山中にうみをなすかも

1810 あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば心苦しも

『堀河百首』において、「荒山」の詠歌は源師時の一首(1369)の  
みである。

1369 うはそくはをこなひすらしまきのたつあらかなやまにまふしき  
しつ、

この歌の三、四句目「横の立荒山中に」は、『万葉集』242の引用  
であり、山中での仙道修行者の修行者である優婆塞の様子を詠じて  
いる。「荒山」は、歌枕、地名と捉えず、単に、荒れている山と解

せるがどちらにしろ、『万葉集』に典拠を求めたと言えるであろう。  
また、「荒山」は、管見の範囲に拠ると『堀河百首』以後に例歌を  
挙げられ、『八雲御抄』に「豊前」と記され、歌枕、地名として定  
着化したと捉えられるであろう。

「まぶしさし」は、『曾丹集』256(『私家集大成中古I』105)に、

256 まぶしさし鳩吹く秋の山人はをのかありかを知らせやはする

とあり、この歌が初出の歌語であろう。また、同歌を出典とした詠  
歌が『堀河百首』に見出せる。

1223 まぶしさすさつを身にも絶えかねて鳩吹く秋のをとたてつ也  
(旅恋)

この歌(1223)は、藤原仲実の詠歌で、「まぶしさす」「鳩吹く秋」  
という詞を撰取している。

このように、「まぶしさす」は、藤原仲実の歌にみえ、『散木奇歌  
集』458の詞書に「障子絵にまふしといふことをして、ししふえふく  
所」とあり、『堀河百首』詠出当時には、かなり一般化した歌語と  
言えるであろう。

このことから、藤原師時の歌は、『万葉集』を典拠とし、しかも、  
獺師ではなく、山中修行中の優婆塞をいう仏教語を詠み入れ、新し  
い歌境を創り出そうという姿勢が見出される。

次に、「まゆみ山」を詠んだ歌は、紀伊(1375)の一首のみである。

1375 引つれてまどるせんとやおもふとち春はまゆみの山に入らん<sup>註4</sup>

「まゆみ山」は、『万葉集』、勅撰集、その他歌集に例歌を挙げら  
れず、しかも歌学書類にも見当たらないことから、新奇な歌枕、地名  
で、しかも一過性のものであったと捉えられる。がしかし、単に、  
檀の生い茂った山とも捉えられる。『夫木抄』には、「まゆみの山下  
野」とあり、同歌がひかれている。

この紀伊の歌の「おもふとち」は、『古今集』126・864に例歌が挙

げられる。

126 おもふとち春の山へにうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか

864 思ふとちまとるせる夜は唐錦たたまくをしき物にそありける

このように、紀伊の歌(1375)は、これらの歌を発想の典拠とした詠歌と言えるだろう。

次に、歌題「山」において、歌枕、地名が詠まれていない歌五首(1362・1366・1371・1372・1374)に触れてみよう。

五首のうち、二首は、先に述べた、大江匡房の歌(1362)と永縁の歌(1372)である。1362は、「柴車」という特殊語に詠み入れ、その柴車に拠ってその山の高さを知ると詠じている。また、永縁の歌(1372)は、旅の哀感を体験的に詠じた歌と受け取られ、この歌は、『新古今集』950 羈旅の部立に配列され、旅の歌として捉えられている。それは、「山」の歌というより、旅に主眼をおいた歌と言える。

また、肥後の歌(1374)は、

1374 白雲にかゝる高根になるほとはいくよつもれる塵にか有らんとあり、高い峰の成り立ちを理知的に詠じている。

歌枕、地名を詠み入れず、『万葉集』に典拠を求められる表現を用いた詠歌として、源俊頼の歌(1368)と藤原基俊の歌(1371)の二首が挙げられる。

1368 いくしほりこえてか人にいはかねのこりしくやまをかへりみる

へき

1371 しら雲のたえまにみゆる水とりのみかものいろのはるの山のはまず、俊頼の歌(1368)の「岩がねのこり敷く山」は、『万葉集』(304・1336)に典拠を求めた表現である。詠歌としてはこの一首のみであることから、源俊頼の新奇な表現と言えるであろう。

304 磐金之凝敷山乎越えかねて音には泣くとも色にいでめやも

1336 石金之凝木敷山尔入りそめて山なつかしみ出でかてぬかも

この304は、『綺語抄』にみられることから、『堀河百首』詠出当時にはかなり注視された表現と言えるであろう。また、1336は、『和歌童蒙抄』、『袖中抄』に取り上げられている。

このように、源俊頼の歌に拠って、「岩がねのこり敷く山」という表現は『堀河百首』成立以降、一般化されたと言えるであろう。また、歌題「山」の十六首中、この一首のみ山登りの苦勞を詠じている。

次に、藤原基俊の歌(1371)の「水とりのみかもの色」という表現は、『万葉集』(455・4518)にみられ、そのうち、1455の歌の一部に類似した表現が見出せる。

1455 水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくも思ほゆるかな

4518 水鳥のかもの色の青馬をけふみるひとはかきりなしといふ

まさに、基俊の歌(1371)は、1455の上三句と類似点が見出せる。「鴨」が「みかも」になり、「羽色」が「色」に変えたのみと言える。このように、『万葉集』1455に典拠を求め、春の山を叙景的に詠じていると言える。

歌題「山」において、歌枕、地名が詠まれていない五首も、類型的発想でなく、様々な発想に拠った詠歌と言える。

以上のように、「山」に詠まれた歌枕、地名の特徴をまとめてみると次のようである。

「山」に詠まれている歌枕、地名は、十一の歌枕、地名がみられ、同一の歌枕、地名に拠る詠歌はみえず、多様性を示している。その十一の歌枕、地名のうち、『万葉集』に例歌が認められるものが、「葛城山」、「妹背山」、「小泊瀬山」、「富士柴山」、「荒山」、「黒髪山」、「足柄山」で、半数以上を『万葉集』に例歌を求められる歌枕、地名が多くを占めている。そのうち、「富士柴山」、「荒山」、「黒髪



「山」は、『万葉集』に典故を求めた歌枕、地名で、しかも、『堀河百首』詠出時代を契機に歌枕、地名として定着化したと察せられる。

また、「小泊瀬山」のように、詠歌例が少なく、『堀河百首』詠出歌人達に拠って注視され、歌枕、地名として定着化したものもみられる。

「越の尾山」、「まゆみの山」は、出典が判明できない歌枕、地名で、しかも、『堀河百首』詠出当時にしか例歌のみえない特殊な歌枕、地名と言える。

このように、『万葉集』に歌枕、地名を追求することだけでなしに、「山」の歌題では、「岩が根の凝敷山」、「水鳥の鴨の羽色」のように、『万葉集』に発想表現を求めたものが指摘できる。それは、『堀河百首』詠出歌人達の『万葉集』に対する関心の高さを示しており、歌題「山」の特徴と言えよう。また、歌枕、地名が重要な役割をしている歌題の一つである「山」において、『堀河百首』詠出歌人達の間では、殊に『万葉集』に馴染みのない、新奇な歌枕、地名を求めた姿が窺える。

それは、堀河百首題において、歌枕、地名が重要な要素になっている歌題にとつて、既成の歌枕、以外の新しく、珍しい歌枕、地名を追求することは、詠作の拡大を計っていると言える。その傾向は、殊に歌題「山」にも顕著にみられる。それは、「山」が、『万葉集』時代より主題としてみられ、詠まれ続けていることと無関係に考えられないだろう。

〈注〉

(1) 『信明集』12(『私家集大成中古I』78)では、「つくまやま」となっている。

(2) 竹下豊氏『堀河百首』の名所歌枕詠——堀河百首研究(5)——

(3) 『女子大文学 国文篇』第四十号 一九八九、三)

(4) 田辺幸雄著『万葉集東歌』(塙書房)

(4) 四句目の「春はまゆみの」の「春」が伝本に拠って「秋」となっている。橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』(笠間書院) 参照。

引用した『万葉集』及び勅撰集は、『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る)に拠った。ただし表記については改めたところがある。